

赤人難波行幸従駕歌の特質

森

斌

はじめに

神亀二年十月、聖武天皇は即位後として初めて難波に行幸された。⁽¹⁾聖武天皇はこれ以降も難波に行幸されているが、前年神亀元年の三月に吉野、同十月に紀伊玉津嶋に行幸していた。さらに翌神亀三年十月に播磨印南野に行幸した帰り、難波宮で藤原宇合を「知造難波宮事」に任命している。これらの行幸の意味については、八木広美氏が簡潔に纏められ、即位儀礼と関連させている。⁽²⁾しかし、これらの行幸には難波周辺の海上交通要衝地であるところから、さらに何らかの配慮もあつたのであろう。また、複都難波宮造宮は、聖武のみならず天武朝における歴代天皇の意志でもあつた。

さて、赤人は、公的な土地誉めの讃歌という制約のなかで神亀二年十月に従駕歌を創作しているのであるが、そこ

にはこの歌独自の特質も見られそうである。

天地の 遠きが如く 日月の 長きが如く 押し照る
難波の宮に わご大君 国知らすらし 御食つ国 日
の御調と 淡路の 野島の海人の 海の底 奥つ海石
に鯨珠 さはに潜き出 船並めて 仕へまつるし 貴
し見れば (六・九三三)

反歌

朝風に梶の音聞こゆ御食つ国野島の海人の船にしある
らし (六・九三四)

引用した難波行幸従駕歌は、山崎馨氏が「宮廷讃歌の伝統を継ぐ端正な佳品」と評価し、平舘英子氏が「御民讃め」と捉えている。⁽³⁾そこで、この考察では、それらの指摘を踏まえて赤人の難波讃歌の特質を探ってみたい。

一、解釈の問題

赤人難波讃歌の長歌は、全体が十九句から構成されている、また前段が八句、後段十一句からなる二段構成である。この讃歌の解釈として、「日の御調」の「日」を臨時の意味とするか、日々の意とするのか、天子の意とするのか、また「鰻珠」を食料の鰻とするか、真珠とするかと言う問題がある。さらに解釈のうえから最大の問題は、第十八句と十九句にある。即ち、「仕へまつるし 貴し見れば」と訓むか、「仕へまつるが 貴き見れば」と訓むか、ということにも展開する。

まず、「日の御調」の意味であるが、土屋文明氏が「ヒはトシに対して、年の貢調等に対する臨時のもの」と解釈が示されている¹⁾。その他最近の注釈書では、「日々の御調」と解釈しているものは、窪田評釈、新潮古典集成、岩波大系、吉井全注、伊藤釈注等である。「天皇の御調」と解しているのは、武田全註、沢瀉注釈、古典文学全集、中西全訳、新編古典文学全集等である。

「鰻珠」の解釈では、「真珠」と解するものが土屋私注、武田全註、沢瀉注釈、岩波大系、古典全集、新編古典全集、新潮古典集成、伊藤釈注であるが、「鰻」と解するものが窪

田評釈、吉井全注である。また、中西進氏は、食料としての鰻貝と真珠と言う解釈を示している⁵⁾。

ここで言う鰻珠が全く食料を意味しているのか、食料を主にした言い方なのか、或いは真珠を意味しているのかは、議論のあるところである。

さて、梶川信行氏は、阿曇連である野島の海人と鰻珠との結びつきを、難波の宮造営を願う住吉の神に対する神事の反映としている⁶⁾。この立場からすれば、これは日々の御調ではなく、天皇に献上する特別な御調なのであるから、食料とする鰻の意味に限定するよりも、当然宗教的な玉である真珠として良い。

野島の海人がわざわざ「船並めて 仕へまつるが」とあるのであるから、食料としての鰻という日々の御調よりも天皇への特別な御調であろうことを考えるべきであろう。即ち、天皇に真珠を献上するところに赤人の主眼があったから、わざわざ船を並べてお仕える姿を描いた、と考えたい。また、それは、「貴し」という最高の讃辞を意味する言葉が鰻という食料を運ぶことよりも、真珠という神事に関わる玉を献上するに相応しい形容にも思える。即ち、日常的な日々食する食料としての鰻であると考ええるよりも、海幸山幸神話に登場するような玉を連想させる特別な神事

を背景にした難波行幸に基づく野島の海人による真珠の献上を、赤人は賛嘆しているのである。また、赤人は、このたびの行幸の目的を理解して、「御食つ国」という淡路でありながら、鮑玉（真珠）という神事に用いる貴重なもの船団が運ぶと表現したことになる。

ところで、万葉集では類型的な表現として、上句で「らし」を用いて、下句でその根拠を述べる形式がある。多くは短歌に見られる形式である。さらにそれらは「……らし……見れば」と言う表現形式で用いられる場合が多々ある。

うちなびく春来るらし山の際の遠き木末の咲き行く見れば（八・一四二二 尾張連）

秋萩は咲くべくあるらしわが屋戸の浅茅が花の散りぬる見れば（八・一五一四 穂積皇子）

黄葉する時になるらし月人の楓の枝の色づく見れば（十・二二〇二）

わが旅は久しくあらしこの吾が着る妹が衣の垢づく見れば（十五・三六六七）

参考に引用したのは全て短歌ではあるが、これらを参考にした時、明らかに赤人の長歌がその形式を基本的に踏ま

えている。まず尾張連の作では、あたりに満ちているだろう春の到来を山の桜が咲くことで推量している。穂積皇子の歌は、茅の花がすっかり散ることで萩が咲き初めることの根拠としている。同様に卷十の歌は、楓の葉が色づくことで秋の黄葉の季節を感じている。さらに卷十五遣新羅使の歌は、恋人同士が衣を交換する習慣を踏まえているが、衣につく垢で長旅になってしまっていることを確認している。赤人の長歌は前段で天皇が難波を都として国を支配すると述べているが、後段では明らかにその根拠として野島の海人が舟を並べて御調としての真珠を献上する貴き様子を言っているのであるから、引用した短歌と歌の構造が同一である。

そもそも長歌の全体は、二段構成である。全体が十九句からなっているが、初句から第八句までが前段で、第九句からが後段になる。さらにこの長歌は、前段が「らし」と結び、後段がその根拠を述べる叙述の展開になっている。第九句から第十八句までが天皇が国を支配している根拠として、御調に奉仕する淡路の野島の海人が語られる。ところが、長歌の第十八・十九句が一般的に今日の注釈書の多くは、「仕へまつるし 貴し見れば」とあるが、吉井巖氏が改めて「見れば貴し」の倒置と解釈する事の問題提起とし

て、「讃歌における上のラシの意味についてより立ち言った解釈を示さねばならない」として第十八・十九句を「仕へ奉るが 貴き見れば」という訓みを採用する。^⑦この訓みは、近代の注釈書では古典文学全集・新編古典文学全集にも採用されている。

この問題については、「貴き」という言葉の吟味にも関わり、さらに讃仰という本質にも関わるので、第四節で改めて考察する。

二、難波と淡路

「野島の海人」が「鰻珠」を海底から採って天皇に献上する、と言う。そもそも野島のある淡路島は、国生み神話の中核になっている。また、古事記では仁徳天皇が淡路に行幸されている。日本書紀では、応神天皇が淡路島で狩猟されているし、「淡路の御原の海人」をお召しになり、兄媛を船で吉備に帰されている。仁徳天皇は「淡路の海人」を水手として採用している。さらに履中天皇が仲皇子の反乱で難波から倭へ難を逃れようとしていた時、敵として「淡路の野島の海人なり。安曇連濱子」が登場している。日本書紀では、応神、履中、允恭の各天皇が狩猟のために淡路に行幸している。このことは歴史の記述からも淡路を中心とした

神話・伝説の存在を示しているが、一方都の人々の淡路に対する感情としては、次の歌謡が参考になる。

淡路島 いや二並び 小豆島 いや二並び 宜しき島
々 誰か た去れ放ちし 吉備なる妹を 相見つるも
の（紀四〇）

応神天皇が吉備に里帰りする兄姫を見送る時の歌である。愛しい女性を失う感情が、難波から見られる島の姿に寄せてうたわれている。この里帰りするための船には難波の大隅宮から淡路の御原の海人八十人が水手として乗り込んでいる。ここで言う御原とは、現在三原郡南淡町にある「阿万」と言うところであろうが、そこも淡路の海人の中心地であろう。一方、履中紀では反乱に味方した海人に淡路の野島の安曇連がいた。恐らく御原と同様に野島も淡路の海人の中心地であったのであろう。

万葉集では、淡路、乃至淡路島が登場する歌は、まず難波・住吉あたりから淡路島を見て、

難波潟潮干に立ちて見わたせば淡路の島に鶴渡の見ゆ

（七・一二六〇）

住吉の岸に向かへる淡路島あはれと君を言はぬ日は無し
(十二・三一・九七)

とうたう。さらに、淡路島にある地名「松帆」「野島の」「浅野」「飼飯」等もうたにうたわれているが、主にはその海・波・岸・浦等と結びついている。例外は「浅野の雉」であるが、その歌語を含む長歌では、

海若は 霊しきものか 淡路島 中に立て置きて 白
波を 伊予に廻らし 居待月 明石の門ゆは 夕され
ば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干しむ 潮騒の
波を恐み 淡路島 磯隠りゐて 何時しかも この夜
の明けむと さもらふに 眼の寝かてねば 滝の上の
浅野の雉 明けぬとし 立ち騒くらし いざ子等あへ
て漕ぎ出む にはも静けし (三・三八八)

とある。

引用した長歌は、都へ上京する途中、淡路島で潮待ちして、夜明けを待って出帆する様子が具体的に描かれている。淡路島は、瀬戸内海を航行する船旅に登場するが、遣新羅使も帰国の時に播磨の家島まで戻ってきて、

吾妹子を行きて早見む淡路島雲居に見えぬ家つくらし
も (十五・三七・二〇)

と故郷の近づいてきたことを淡路島の存在で表現している。一方西に向かう船旅では、人麻呂歌に野島が登場している、

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野島の崎に舟近づきぬ
(三・二五〇)

と、うたわれる夏草の繁る荒涼とした場所であった。

野島の海人が御調を献上すると言うことが、やはりこの赤人難波讃歌では大切なことなのであろう。嘗て謀反したこともあったあの遠く荒涼とした野島の海人でも、今は天皇の御調のために船を並べて難波にやってくると言うところ、理由がありそうである。そして、阿曇氏である野島の海人が玉である真珠を献上した可能性が高いであろう。さらに難波宮についてはどうであろうか。

聖武天皇は、難波に在位されてから崩御されるまで八回行幸されている。神亀二年に始まり、天平勝宝八歳まで続

いている。複都という政治的な意図もあったのであろうが、神亀三年十月には藤原宇合が「知造難波宮事」に任命されていて、その時に詠まれた宇合の歌が、

昔こそ難波田舎と言はれけめ今は京引き都びにけり
(三・三二一)

と、万葉集に収録されている。

そもそも難波宮は、仁徳、孝徳の旧都であり、朱鳥元年に全焼している。持統、文武も難波に行幸していたが、聖武が即位した頃は荒都であったのであろう。

万葉集中で難波と言う地名は、ある特定の景物と結びついている。難波と葦、難波と網引き、難波を松、と言う組み合わせであるが、さらに住吉（大伴の三津を含む）と言う地名では、忘れ貝、黄土、榛も加わる。特定の組み合わせは、歌枕としての存在に繋がるのであろうが、それだけに人々が風景に魅了されたのであろう。嘗て都があり、さらに難波津（大伴の三津）という国際港があり、要衝の地であるから、人々が頻繁に往還したのであろう。九州に、四国に、さらに唐・新羅に向かう人々は、旅にあつて故郷を偲ぶ歌がある。さらに大和にない海は、歌心を刺激して

止まない白砂青松の岸辺も存在させていた。一方、潮の干満や、風波は、淡路野島からの船旅であっても命のやりとりをするような恐れを伴っていたはずである。

ちなみに万葉集から遣新羅、遣唐にまつわる歌としては、天平五年遣唐大使丹比広成に献上した山上憶良の「好去好来歌」に、

……あちかをし 値嘉の岬より 大伴の 御津の浜辺
に 直泊てに 御船は泊てむ 恙無く 幸く坐して
早帰りませ（五・八九四）

と、難波津がうたつてあつて、航海の安全を祈っている。時間同じ頃笠金村は、遣唐使に対して、

……夕されば 鶴が妻呼ぶ 難波潟 三津の崎より
大船に 真梶繁貫き 白波の 高き荒海を 島伝ひ
い別れ行かば……（八・一四五三）

と、難波津からの出発の様子を、大船が梶をたくさん具え、白波の高い難波の海を島伝ひである、と描写している。

そもそも難波から淡路が旅愁の対象であったのは、淡路

島までの船旅といえども潮の流れや風波による危険なものであったからである。また、明石海峡からは、畿内と畿外ということで区別されるのであるから、その土地がもつ情緒もまるで異なる。畿内の難波と畿外の淡路野島とが一首に歌い込まれているために、この長歌は畿内に止まらない拡がりが見られる。即ち、赤人は、難波の海で野島の海人が船を並べて漕いでいるといたいながら、淡路の野島という地名を挿入することで、明石、須磨、真野、敏馬、菟原、武庫、そして難波津という海人がたどった航路迄も連想させ、淡路島を中核にした海人の神話でもある「島伝へ」(一四五三)という大八島国という広大な国土にもつながるのである。神亀二年の行幸には、金村・千年も讃歌を作っているが、この空間の拡がりには、赤人の難波讃歌にのみ指摘できるのである。即ち、前段が対句で無限なものとして「天地」と「日月」と提示していたが、後段でも淡路の野島の海人を登場させて、大和朝廷の支配する広大な国土を表現したのである。

三、対句について

赤人長歌の対句については、阿蘇瑞枝氏に詳細な考察がある⁽⁸⁾。赤人の長歌は十三首あるが、それらには必ず対句が

使用されている。この難波讃歌においても、使用された対句には個性的な表現が指摘できそうである。煩雑ではあっても、比較する意味もあることを配慮して、赤人十三首の長歌に於ける対句の全てを、次に取り上げる。

① 不尽山を望める歌(三・三一七)

渡る日の 影も隠らひ

照る月の 光も見えず

② 伊予の温泉に至りて作る歌(三・三二二)

臣の木も 生ひ継ぎにけり

鳴く鳥の 声も変らず

③ 神岳に登りて作る歌(三・三二四)

つがの木も いや継ぎ継ぎに

玉かづら 絶ゆることなく

山高み

河と雄大し

春の日は 山し見がほし

秋の夜は 河し清けし

朝雲に 鶴は乱れ

夕霧に 河蝦はさわく

④ 春日野に登りて作れる歌(三・三七二)

昼はも 日のことごと

夜はも 夜のことごと

⑤勝鹿の真間娘子の墓を過ぐる時の歌（三・四三二）

真木の葉や 茂りたるらむ

松が根や 遠く久しき

⑥紀伊国に幸しし時の歌（六・九一七）

風吹けば 白波騒き

潮干れば 玉藻刈りつつ

⑦吉野讃歌（六・九二三）

春べは 花咲きををり

秋されば 霧立ち渡る

その山の いやますますに

その川の 絶ゆること無く

⑧吉野讃歌（六・九二六）

野の上には 跡見すゑ置きて

み山には 射目立て渡し

朝獵に 鹿猪履み起し

夕狩に 鳥踏み立て

⑨難波に幸しし時の歌（六・九三三）

天地の 遠きが如く

日月の 長きが如く

⑩印南野に幸しし時の歌（六・九三八）

鰯釣ると 海人船散動き

塩焼くと 人そ多にある

浦を良み 諾も釣はず

浜を良み 諾も塩焼く

⑪辛荷の島を過ぎし時の歌（六・九四二）

青山の 其処とも見えず

白雲も 千重になり来ぬ

漕ぎ廻むる 浦のことごと

行き隠る 島の崎々

⑫敏馬の浦を過ぐる時の歌（六・九四六）

沖辺には 深海松採り

浦廻には 名告藻刈る

⑬天平八年吉野応詔歌（六・一〇〇五）

山高み 雲そたな引く

川速み 瀬の音そ清き

神さびて 見れば貴く

宜しなべ 見れば清けし

この山の 尽きばのみこそ

この川の 絶えばのみこそ

明らかに難波行幸の用例は、他と異質である。それは、基本的に存在を示し得る具象的な物であるか、或いは視覚的に捉えられる物で表現しているのかがその他の対句表現であるのに対して、難波行幸讃歌では天地と日月の遠い距離が話題になっている。

赤人は、讃歌の冒頭では天皇を讃仰する「やすみししわご大君」ではじめる場合が圧倒的である。或いは、伊藤博氏などは、難波讃歌を除いて赤人の讃歌がその冒頭形式で始まるとする。⁽⁹⁾ 難波行幸讃歌も讃歌の類型表現に近い。

即ち、天地の如く遠いとか、日月の如く永遠であるとか、と言って長歌が始まっているが、これは元明天皇即位の詔に、「近江大津宮御宇大倭根子天皇乃天地共長与日月共遠不改常典」(『続日本紀』慶雲四年七月)という表現があった、吉井巖氏はそれを踏まえたとする。⁽¹⁰⁾ まさしく冒頭の四句は、詔を踏まえた天地の遙かな長さと日月の永遠ということと天皇の統治を長久なるものとして讃仰すると言う内容である。

但し、対句として見る時に赤人の類型と言う内容よりも、むしろ個性的であるというべき性格がそこにあるのではないか。それは、宇宙の距離とか時間とかということとは、この当時の人々にとっては極めて抽象的な神話とも言うべき

内容であるからである。人麻呂は、「天地の 初めの時」(二・一六七)と言い、赤人は、「天地の 分かれし時ゆ」(三・三二七)と述べた創世神話を用いていて、それに基づく宇宙である。さらにこの「天地」であるが、「地」とは、海を含む地である。従って、長歌の前段でいう「わご大君 国知らすらし」とは、海をも含む大八島ということである。天皇が海を含む国土の隅々までも支配していることを、赤人は海人の登場により描いているのである。

さて、天地が遠いということは、天文学が発達した現代、或いは望遠鏡が発見された時代以降であれば、星と月の距離の違いもよく分かるであろうが、星と月とはどちらが遠いか、或いは近いのが古代に議論されている。また、実在し且つ渡来した人も居た中国や古代インドですら遙かなる地である。また、それは、天地と月日の間が長いと言って表現した時間も神話的に解釈されたものである。即ち、宇宙の歴史もそれなりに分かっている現代と異なり、知識人には仏教的な宇宙と時間の認識があったとしても、聖武天皇の八世紀という時代においては、距離も時間も漠然としていて、明瞭な形、或いは数字という概念ではなかなか掴まえにくいものであろう。その神話とも言える長久の時間を、天地と日月で対句として表現したところに手柄

がある。

ちなみに神亀二年の吉野讃歌に「その山の いやますますに その川の 絶ゆることなく」(六・九二三)と言う対句があるが、山も川も具体的であり、尚かつ視覚で認識できる。その山が無くなり、川の流れが絶えるというのであるから、まさしく視覚で捉えられるものであるが、その対句は大官人が吉野の宮に常に通うことを強調するための表現である。山の存在と川の流れの永遠であることは、当然のこととして理解できるとして、天地と日月という壮大な宇宙までも含む表現とはやはり異質である。表現の強さは、歌われた場所等を参考にして判断せざるを得ないが、吉野の讃歌には当然存在した伝統の制約もある。しかし、難波行幸で赤人が「やすみしし わが大君」と冒頭をはじめないで、詔にある天地と日月の長久を長歌に取り入れた手法は、評価して良いものであり、個性的と言う意味でも成功した表現である。

さて、ここで赤人の対句を構成している対偶する言葉を配慮してみたい。日と月、影と光、木と鳥、つがの木と玉鬘、山と川(2)、春と秋(2)、昼と夜、朝と夕(2)、鶴と河蝦、真木と松、野と山、天地と日月、釣りと塩焼き、浦と浜、青山と白雲、浦と埼、沖と浦等が対句で使用され

ている対偶の言葉として採り上げられ、それらは当然のこととして対照が明確である。勿論、対偶とすべき言葉がなくても⑥番の用例の如くに対句になっている場合が当然存在する。

ところで赤人の対句を見ていく時に、そこには共通のものによつて類型に分類できる。阿蘇氏は、「列举」、「言いかえ」、「対照」、「強調」と言う言葉で説明している。⁽¹⁾ちなみに九三三番の対句は、九四二番の対句「青山の 其処とも見えず 白雲の 千重になり来ぬ」という例と同一で「言いかえ」と性格を規定した。同じ言いかえと言いながら、この二例には根本的な相違がある。九四二番は、淡路の野島を過ぎ、印南の端にある辛荷島から我家を振り返って見たら、青山ばかりで、なお幾重も重なった白雲の彼方になつていたということであるから、眼で捉えられないと言っている。九三三番が抽象的な神話の内容であることは、既に説明した通りである。見える、或いは見られないと言ったことは、天地と日月の無限に近い距離と時間とは当然比較すべくもない内容である。赤人の他作品と比較しても、この対句表現が個性的である事を知るのである。

四、「貴し見れば」

第十八・十九句を「仕へ奉るが 貴き見れば」という訓みを採用している注釈書もあるが、その問題解決には「貴き」という言葉の吟味がまず必要であるし、さらに讃仰という本質にも関わる。

そもそも聖武天皇の即位後は、難波周辺の行幸が見られる。紀伊玉津嶋、播磨印南等の地であるが、それらは即位儀礼であってもそれだけに止まらない配慮があった、と梶川氏は指摘している⁽¹²⁾し、住吉の神に対する神事が行われたのであろう。讃歌の理解からも、赤人がわざわざ淡路野島の海人と真珠の献上を詠んだのは、天皇の統治が国の隅々まで行き渡っていることと、さらに神事に欠くことの出来ない玉としての真珠を表現した、と解釈されてよい。

しかし、野島の海人は、かつては謀反人に味方したこともある。その海人が奉仕する姿を「仕へまつるが 貴し」と言うことになるのであろうか。「貴し」とは、讃美を意味する特別な言葉である。ちなみに万葉集からどういう言葉に形容するか、その用例を取り上げれば、山や聖地に、神に、天皇に、宮に、そして父母に対しては複数例が紹介出来る。しかし、赤人も孤立した用例であるので、孤立し

た例のみをここでは取り上げたい。

①「春花の 貴からむと」(二・一六七 人麻呂)

②「極まりて貴きものは酒にしあるらし」(三・三四二 旅人)

③「世の人の 貴び願ふ 七種の 宝もわれは」(五・九〇四 憶良)

④「降る雪の光を見れば貴くもあるか」(十七・三九二 三 紀清人)

⑤「色毎に見し明らむる今日の貴さ」(十九・四二五五 家持)

引用した①は、人麻呂は日並皇子の将来に期待すること
を春花に比喻しているのであり、天皇に期待する内容と等しい。同様に④紀清人雪の光も天子の恵みに喩えているし、また⑤の家持の例も天皇を比喩的に讃えたものである。天皇に関わらないのは、③憶良と②旅人の例と言うことになる。その意味では、七種の宝と酒とが益々貴重なものに思える。以上の例から、万葉集では、最上の誉め言葉として用いられたのが「貴し」と言う言葉であったことを確認するのである。これまで考察してきた赤人の長歌は、見るこ

とに主眼があった。

ちなみに「貴く見れば」と言う句は、この歌の訓を認めたときに唯一の例であるが、「見れば貴く」(六・一〇〇五、十八・四一〇六)「見れば貴し」(五・八〇〇)もあるし、さらに「見ればかなしも」「見ればさぶしも」をはじめとして、「見れば……」という形式が一般的である。とりわけ人麻呂の吉野讃歌でも「見れども飽かぬかも」(一・三二六)とあり、笠金村も同様に「見れど飽かぬかも」(六・九〇九)と用いていて、見るのが讃歌の伝統として庶幾されている。従って、見るのが貴いことに展開していくのであって、やはり海人が天皇のために奉仕する姿を見て讃美をそこに見いだしている、と考えたい。それは、貴いと思ふ対象が酒、宝、雪明かり、天皇等であって、直接天皇でなくても天皇に奉仕することでもよい。但し、卑しいはずの海人の姿を直接貴いとするには、やはりはばかられる。万葉に一例有る「見れば尊し」(五・八〇〇)の句は、憶良の作品であり、対象は父母である。海人の奉仕する姿を見ることで尊いという讃美が生まれるのである。

万葉の用例からは、見るのが貴いのであり、やはり海人の奉仕する姿を見ることで讃歌としたとすべきである。とすれば、十八・十九句の読みは、「仕えまつるし 貴し見

れば」と言うことになる。

ところで、神亀二年の難波行幸では、笠金村と車持千年も行幸讃歌を作っている。

冬十月、難波の宮に幸しし時に、笠朝臣金村の作れる歌一首并せて短歌

押し照る 難波の国は 葦垣の 古りにし郷と 人皆の 思ひ息みて つれも無く ありし間に 續麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経の原に ものふの 八十伴の緒は 廬して 都なしたり 旅にはあれども (六・九二八)

反歌二首

荒野らに里はあれども大君の敷き坐す時は都となりぬ (六・九二九)
海少女棚無し小舟漕ぎ出らし旅のやどりに梶の音聞こゆ (六・九三〇)

車持千年の作れる歌一首并せて短歌

鯨魚取り 浜辺を清み うちなびき 生ふる玉藻に 朝風に 千重波寄せ 夕風に 五百重波寄す 辺つ波

の いやしくしくに 月にけに 日に日に見とも 今のみに 飽き足らめやも 白波の い開き廻れる 住吉の浜 (六・九三二)

反歌一首

白波の千重に來寄する住吉の岸の黄土ににほひて行かな (六・九三二)

笠金村の讃歌は、第一反歌に具体的に示されている難波の宮を讃えるところにある。長歌でも、難波などは古くなった里で人々がつれなくしていたのに、味経の原に仮宮を建てて宮廷にお仕えする沢山の官人が都にしたとうたう。車持千年は住吉の浜が白波の花を咲かせた清らかところであると述べている。まさしく土地誉めで讃仰の心としたが、赤人のそれとは比較にならない。山部赤人は、海人の奉仕する姿を見ることで最上の讃美があるのであって、その見ることと祝福をしているのである。

ちなみに、記紀歌謡からの伝統として「国見歌」と言うことがある。土橋寛氏は、三つの形を指摘している。第一が「……から……を見れば」と言う発想、第二が「出で立ちて……見れば」と言う慣用語、そして第三が見る対象の讃美表現として「うまし国ぞ」(一・二)等を国見歌の特

質として指摘している。赤人が国見歌の発想で歌を詠んでいることは、長歌を「貴し見れば」と結んだことで土橋氏のいう第三の特質として現れている。しかも、「見る」ときに賞賛を込めた歌であるから、伊藤博氏の「見る讃歌」と言う内容にこの難波讃歌が当てはまる¹⁴⁾。従って、万葉集の伝統である見るといふ国見形式をふまえているのであるから、長歌の結末部は、「船並めて 仕へまつるし 貴し見れば」で良いであろう。即ち、船を並べて奉仕する姿を見ることで「貴し」という天皇を讃美するのがこの歌なのである。赤人の長歌は、海人の奉仕が「貴し」ということではなくて、「見る」ことで「貴し」という「見る讃歌」である。

五、梶の音

そもそもこの難波行幸に従駕した赤人が如何なる意図で国見歌の伝統を踏まえて行幸従駕の歌をものしたのであるうか。神亀二年の難波行幸は、金村・千年それぞれが目的の一致させた歌を創作していても、その視点や対象が異なっている。

笠金村は、旅の仮宮を多数の宮廷人によって都と成したと讃え、車持千年は、白波が寄せる住吉の海岸が花を開か

せていると誉めていた。

しかし、この兩名の讃歌と異質なのは、赤人長歌には前段で明瞭に天子を読える言葉が用いられていることである。そこに赤人の個性的表現としての手柄もあつたのであるが、さらに反歌では、長歌が見る視点からであつたものを、聴覚の視点から讃美を描いている。そして、赤人が金村の長歌と反歌を意識していることは、言葉からも知られる。金村の長歌冒頭にある「押し照る 難波の国は」を赤人の長歌では「押し照る 難波の宮に」と継承させて用いている。また、赤人は「朝風に 梶の音聞こゆ」（九三四）と反歌の上句で用いるが、これは自作長歌の「船並めて 仕へまつりし」（九三三）を受けているのみならず、笠金村の反歌にある「梶の音聞こゆ」（九三〇）をも継承して発展させている。さらに、梶の音が「朝風に」聞こえてくると言うが、これは千年の「朝風に 千重波寄せ」（九三一）を継承している。

ちなみに長歌が視覚によって描こうとしたことから反歌が聴覚に重点を置いてうたうのは、既に吉野讃歌（六・九二三～九二七）でも試みた方法である。とりわけ二首の反歌（九二四、九二五）は、騒ぐ鳥の声と千鳥がまた鳴く事によって、寂寥を感じさせている。

金村は、漁師の娘子が棚無し小舟を漕ぎ出したらしいことを梶の音から推量するのであるが、赤人は野島の海人が船漕ぎしていると想像している。吉野讃歌の反歌では視覚から、鳥の声という聴覚に訴えて寂寥ということに展開しているが、難波讃歌の反歌ではどうであろうか。

そもそも「梶の音聞こゆ」という句は、万葉集で八首に用いられているが、まず田辺福麻呂の歌が注目される。

福麻呂は難波の宮で作った宮誉めの讃歌では、

あり通ふ 難波の宮は …… 朝はふる 波の音騒き

夕風に 梶の声聞こゆ（六・一〇六二）

とあつて、潮騒と梶の音が聞こえてくることも宮を誉める形容の一部になっている。同様に大伴家持は、梶の音を直接描写していないが、次に引用するように赤人や福麻呂等の影響かとも判断される描写がある。

…… 敷きませる 難波の宮は 聞し食す 四方の国
より 奉る 貢の舟は 堀江より 水脈引きしつづ
朝風に 梶引き浜り 夕潮に 棹さし下り ……

（二十・四三六〇）

ちなみに卷十三には、

…… 大伴の 御津の浜辺ゆ 大船に 真梶繁貫き 朝
風に 水手の声しつつ 夕風に 梶の音しつつ …… (三
三三三)

ともあつて、難波の宮や、大伴の御津浜等では、歌の世界に梶の音が無くてはならない伝統とするものであったのである。金村は上句で「らし」を用いて、下句でその根拠を述べる形式に対して、赤人は下句の「らし」と言う根拠が上句に示されていても、類歌である。さらに、梶の音がすることが豊かな港を意味しているのではないか。例えば、

さ夜深けて堀江漕ぐなる松浦船梶の音高し水脈早みか
も (七・一一四三)

蘆刈りに堀江漕ぐなる梶の音は大官人の皆聞くまでに
(二十・四四五九)

の二首があり、さらに家持が天平勝宝八年二月に聖武太上天皇と光明皇太后が難波に行幸された時にも、

堀江漕ぐ伊豆手の船の楫つくめ音しば立ちぬ水脈早み
かも (二十・四四六〇 家持)

堀江より水脈さかのぼる楫の音の間なくそ奈良は恋し
かりける (二十・四四六一 家持)

と詠んでいる。

楫の音が港の繁栄する様子に結びつくのであろうから、金村も赤人も栄えている難波港と言う意味も、そこには込めているのである。赤人は、難波の海で野島の海人が船を並べて漕いでいるとりたいながら、淡路の野島という地名を挿入することで、明石、須磨、真野、敏馬、菟原、武庫、そして難波津という航路も連想させている。この空間の拡がりや赤人の難波讃歌には指摘できるのである。加えてあの野島の海人が鰯玉を献上するために奉仕する船を最上の評価をとまう形容の言葉を用いて描いたことが、赤人の聖武天皇讃辞なのであったが、加えてその反歌でも航海している梶の音までが、伊藤博氏の言う「聞く讃歌」として天皇讃辞に結ぶつくのである。¹⁵⁾

結 び

聖武天皇が神亀二年に難波行幸をされた時、赤人が長短二首の讃歌をものした。この時には笠金村と車持千年とがやはり讃歌を創作している。これらに影響されながらも、赤人の讃歌には特質が見られた。まず、讃歌の基本として難波行幸の目的が、神事にあつたことを踏まえていることがある。それは、海人の奉仕を天皇に対する鰻玉の御調という神事に関わるとして理解を示していることに伺える。長歌の前段では、神話の世界とも言うべき「天地 遠きが如く 日月の 長きがごとく」と言う特徴的な対句使用がある。又、後段では、天皇の支配する国土が海原をも含む「地」であり、淡路の野島の海人を登場させて、大八島といった国の隅々までも含む国土を描くことにもなった。さらに長歌の見る讃歌が、反歌において聞く讃歌の内容になつていることも、この赤人難波歌の特質である。

解釈の問題として、天皇の御調、鰻玉、さらに「仕へまつるし 貴し見れば」等もあるが、この讃歌が徹底した讃仰精神で作られていたことは、赤人の創作に対する意気込みと緻密な配慮を知る。即ち、この神亀二年前後に讃歌を複数ものしているが、赤人の創作は、一つの頂点ではな

かったか。とにかく意欲的に創作していて、難波讃歌長短二首は、赤人という個性が発揮されていた端正な作品である。

〔注〕

- (1) ①神亀二年十月②神亀三年十月、③天平六年三月、④天平十二年二月、⑤天平十六年閏正月、⑥天平十七年八月、⑦天平勝宝八歳二月、⑧天平勝宝八歳三月のそれぞれに行幸した。万葉集によれば神亀五年も行幸している。
- (2) 「金村神亀二年難波行幸歌」(『セミナー万葉の歌人と作品(第6巻)』所収)
- (3) 山崎氏「難波宮行幸時の歌」(『万葉集を学ぶ第四集』所収)
- 平館氏「金村・千年・赤人——難波の宮行幸供奉歌群をめぐって——」(『東京成徳短期大学紀要11』)
- (4) 『万葉集私注卷六』九三三番注
- (5) 『万葉集全訳注』九三三番注
- (6) 『万葉史の論山部赤人』(第三章第三節・第四節)では、住吉大神に鰻珠を奉ることで難波の宮の安泰を祈願する、或いは事何かあるときには、外征を容易にする呪術を可能にする儀礼に関わる鰻珠の存在を指摘する、している。
- (7) 『万葉集全注卷六』七二—七三頁
- (8) 「後期万葉長歌における対句表現——赤人・金村を中心に——」(『国語と国文学』61・4)
- (9) 『万葉集釈注(巻五・六)』三二〇頁
- (10) 注7に同じ。七一頁
- (11) 注8に同じ。

(12) 注6に同じ。

(13) 『古事記歌謠全注釈』国見・山見歌の型と解釈 二二九頁

二三〇頁

(14) 注9に同じ。

(15) 注9に同じ。